



## 巻頭言

「無知の知」と「無知の科学」  
— 足らざるを知ることの難しさ —東京理科大学 火災科学研究所教授  
松原 美之

「無知の知」は、古代ギリシアの哲学者・ソクラテスの言葉とされており、「不知の自覚」とも表現され、“知らないことを自覚すること”の困難さを示す。「無知の科学」は最近文庫本化されたスローマン他の著作「知ってるつもり 無知の科学:The Knowledge Illusion)」に依った。人は、自身では知っているつもり的事柄について説明を求められ説明をしようとした時、すぐに説明に詰まってしまい、実は理解していなかったことに気づかされるという、自身の理解度に対する幻想を分析した、認知心理学の良書である。

教員という職業に転じて教える機会が増え、その結果、自身の無知に気づかされる機会が当然のように増え、自身の無知・理解の浅さを再認識させられ続けている。先週、卒業した留学生の一人から在学時の授業で教えられた事柄に関して理解できない点があると遠隔会議を申し込まれた。母国で教える立場になったとのことで、理解したつもりであった事柄についての説明を自身が出来ないことに気づいたとのことであり、「知っているつもり」がここでも真実であったかと、ほくそ笑んだ。また、COVID-19以前であれば、海外の卒業生への補講を遠隔会議で実施するなどということは考えられなかったと、この2年間の自分自身を取り巻く遠隔会議システム環境の変化に驚かされた。

「『この世の天国とは、コックはフランス人、警官はイギリス人、技師はドイツ人、銀行家はスイス人、恋人はイタリア人』、『この世の地獄とは、コックはイギリス人、警官はドイツ人、技師はフランス人、銀行家はイタリア人、恋人はスイス人』」というように、民族の民族性、もしくはある国の国民性を端的にあらわす話によって笑いを誘うエスニックジョーク (ethnic joke) がある。勤務している大学院はアジアからの留学生が半数近くを占めているため、彼らと接してお国柄というものを実感する。国、民族だけでなく、親族、地域、企業など、人の集団には、集団としての性格があり、集団としての記憶があると言われており、集合知 (集団的知性) という概念につながる。化学工場の規制に関しても、組織ごと、府省ごとに考え方の相異が生じる所以であろう。

産業安全関連研究所で、防爆規制における危険箇所の定量的判断基準に関する研究が行われていることは以前から知っていたが、「プラント内における危険区域の精緻な設定方法に関するガイドライン」(経済産業省:以下「ガイドライン」)を通じて、危険物規制の世界につながって来たことを最近知った。ガイドラインの目的の記述に「ヒューマンエラーを防ぐ必要」の文言があるのを見つけて新鮮に感じた。ヒューマンエラーを防ぐために精緻な判断基準を導入するというのであるが、精緻な判断を求められる人に「不知の自覚」の欠如が無いことを願う。消防は保守的であるとその文化を批判的に語る人もいるが、世界的には大規模事故を起こさない日本は、この保守的な文化に依るところもあり、大切にしないといけないのではないか。